

ネット健康問題啓発者養成全国連絡協議会の皆さんへの ラストメッセージ・論説

宮城県小児科医会報より(最終版)

ネット問題啓発者養成全国連絡協議会協議会のみなさまへ

言葉と映像メディア～人間の進化と未来への新たな祈り

明日の子どもや大人に伝える～人は何処にいくのか

ネット問題啓発者養成全国連絡協議会協議会共同代表 田澤雄作

人は何処へいくのか。人間は脳とこころ(身体)を獲得し、生きる。家庭の内外で、幼い感情が爆発しないように、コントロールできる抑制力を獲得し、社会的習慣を学びながら子ども期を過ごし、それまでの多様な経験・体験の中で成熟し、家族や隣人と共に生きる。その基本である「命を次世代に繋ぐこと」なしには人類は消える。

1950年以降、大人も子どもも次々と登場するテレビ・ゲーム・スマホにのみこまれ、それらの弊害に気づきながらも放置し、コミュニケーション力が衰退した。ありえない情報や凶暴な映像の大潮流に流され、家族の時間、そして子どもの成長のために必要な環境を奪い、幼いままの子ども、未成熟な大人を次々と作りだした。現代社会の政治・経済・教育・医療全てが、幼い大人の考えかたや「無視・無関心」の惰性の中で、家族や隣人と「ささやかなに生きる」平和な日々が失われる未来が寒々と危惧されている。子どもらの健やかな成長とその未来の幸せのために私たちにできることを再考したい。

1. 国を挙げての読書推進～夢か幻か？

1994年、子どもの権利条約が発行され、おくれて2004年、日本政府も批准した。この頃学校(教育)は、行き過ぎた進学競争や学習塾通い、部活動に走りだしたが、国を挙げての読書推進も謳われた。しかし、環境の問題があり、読む子どもと読まない子ども(テレビ・ゲーム・スマホで時間を潰す)子どもの二極化を残した。過度な進学競争は受験産業に追従し、受験のために、読む・考える時間を削り落とすまる覚えドリルが採用され、みかけの学力の学力向上や均一化は促されましたが、そこにも貧富の差も影響し格差がさらに拡大した。

近年では、個別最速化と称して、コンピューターを道具とするICT・GIGA教育が、経済界からの要求により、民間の公的学校教育が参入し、市場化が増強し、さらに家族の時間が削られた。教育は子どもの発達(大人になる)を願うのが本旨であり、学校での

学び合いの中で、自分・他者・世界との対話が成立し、子どもの成長と成熟が成立する。

2. 言葉の始まり

本は言葉の器ではない。人間の感覚や思想が織り込められたものであり、読書することで、人々の多様な間接的経験を積む。以前、絵本「だくちる だくちる はじめてのうた」(V.ベレストフ 原案 坂田寛夫 文 長新太 絵)を読んだ時に、歌声から言葉がうまれたのかなと感じました：大きな恐竜イグアノンは寂しい世界にいました あるひだくちる だくちる おとがした ちいさなプテオダクチルスが とんできた イグアノンはちいさなともだち みつけた ちいさなともだちは はを きらせうなる だくちる だくちる イグアノンは だくちるをきくと どんどん ばんばん うれしかった それはちきゅうにうまれた はじめての うただったから (略)。

3. 光あれ～そのまえに言葉あり

ある神父さんに6日間の天地創造のお話を伺い、お互いにきづいたことがありました。一つは「光あれ」です。しかし、ここでは言葉が光を導いています。2つめは「悪魔の誘惑」です。「私に従えば、空を飛べる、石をパンに変えることができる」、そして最後に、幻の繁栄都会をみせて、「私に従えばすべてを与える」と誘惑されたが、拒絶され姿を消します。この幻は虚像(映像)であり、現代の映像メディアそのものではないでしょうか。

4. 映像メディア

中世の終わりまで、子どもは大人のミニチュアとして扱われ、大人の労働力の一員にくわえられ、親の子への愛情は希薄なまま、その命は尊重されなかった(子どもは死んでも代わりはいくつもある)。16世紀、古典的教養の再発見とともに、印刷技術はその普及に寄与し、ルネサンス、宗教革命とともに、人間は「子ども期」の存在を知る。紀元前のギリシャ・ローマ時代に存在した嬰兒殺しの禁止が忘れさり、子どもの教育や愛情が復古した。など

印刷技術につぐ電気・通信の発明は活字による情報手段の進化を促したが、グラフィック革命からテレビ(映像メディア)時代が次いで鎌首をもたげた。1950年代のアメリカ、1960年代の日本はその潮流に翻弄され、テレビに人間の自由な視線と時間を奪われ、大切な家族や友だちとのコミュニケーションの時間や睡眠時間までが奪われ、慢性的な心身(脳と身体)の疲労を気づきながらも問題の解決は後回にし、その重度を深め、最後に子どもの成長・発達に必要な大量の時間を奪われ、社会的(後発性の)発達障害(大人になれない～大人子ども)をつくりだした。

この10年の人類の行動変容(コミュニケーションや他者との比較)の主因は、デジタル化したライフスタイルにある。デジタル関連の習慣だけでなく、人類未経験のストレス、運動や睡眠時間の減少、すべて脳にしてみれば未知の世界のだ。人間はデジタル社会に適応せず、私たちの脳はまだサバンナで暮らしている。現代に特異な精神的不調から身を守る要素は、サバンナ時代と同じように「睡眠、運動、他者との関わり」が重要な要素である。集中力は現代の貴重品だが、脳には切り替え時間が必要で、注意残余 (attention residue) と呼ぶが、元の脳活動レベルに戻るには何分も時間がかかる。一本のメールさえ脳の活動を低下させ、その回復には15～30分必要とする。20本でも5時間以上となる。

5. 子どもの発達

人間は、唯一言葉(と理性)を備え進化した。多様な文化の中で、三つ子は魂を持ち、7つまでは万能な神の子とみられていた。3歳の子どもは大人の言葉を理解し、7歳の子どもは大人と同じように話せるようになり、その土台(言葉)の発達を背景にして、人間の子どもは難解な思春期を超えて、人間の心をもつ大人となる。

その発達を中心に前頭葉がある。ほかの脳の領域とはことなり、30歳までの時間をかけて成熟していく。その過程に不具合が生まれると、集中力や注意力は発達せず、脳機能は半ば反射的に反応し、いつまでも幼い子どものように泣き叫ぶ。社会力、抑制力、決断力、他者とのコミュニケーション力が発達せず、礼儀や羞恥心の希薄な、感情的に暴発する、決断さえ無視か無関心、感情的な好き嫌い(白か黒)の判断に流される。他者の心を理解する力の希薄化の背景にあるのは、ほとんどが、幼い時代からの言葉やコミュニケーションの発達を障害する社会環境にある。

6. 絵本・本

テレビなどの映像メディアから流される「大人の秘密」、暴力、殺人、性的情景は、子どもにはある年齢までは晒してはいけない。死さえ子どもへの暴露をあれだけ慎重に取り扱った文化は消えている。

絵本(おとぎ話)の重要性は、精神的な痛手なしに悪の存在を子どもが統合できるような形を示す力である。おとぎ話が語られる心理的背景には、いつも安心していられるもの、治癒力があるからである。

映像画面に出てくる暴力には母親の声の仲立ちがない。子どもの発 ga が理解されず、子どもの暴力の引き金をつくりだす。

7. 家族の変容～ひきこもり

中世まで、人々は極端な併存のうちで生活していた。高い身分のものも貧民も隣り合わせで生活していた。しかし、ブルジョアジーは取り囲まれ多数の人間に感じる圧力、下層民衆との接触に耐えきれなくなり、同質者の集まる新しい市街区域の中にひきこ

もり、分離した。17～から18世紀に至り、人間は街路・や広場(社会)からひきこもり、集合的活動から離れていく。家族は十分に防衛された家屋の内部にある、親密性の配慮が行き届いたものとなる。私生活化は、新たな母親と子どもの感情が発達させる。子どもの教育への関心は、女性の地位上昇とともに、やがて母子関係の強迫観念を生じさせた。

8 家族意識～小子化のはじまり

昔の生活は、18世紀までは公衆の面前で行われ、プライバシーまで社会が介入する権利を持っていた。四六時中、来客にさらされる家の中、家族の場がなかった。人々は社会から身を守り始めた。旧来の関係が引き裂かれ、近所付き合いや友人関係、伝統的な人間関係を犠牲にし、プライバシーを増強し、社会的活動を窒息させた。やがて夫婦のエネルギーは、子どもを数少なく育て、教育し、子どもの出世に向けられていく。

9. 教育

中世文化は、古代人たちの教育(パイディア)を完全に忘れ去り、教育という観念を持たないまま沈黙し、1,000年以上の時間を費やした。今日の社会は教育システムの必要性を自覚しているが、通俗的な解説書が両親に届けられているだけで、大人は子どもの生理的、道徳的、性的な諸問題に強迫観念のようにつきまとわれている

近世の初頭、教育的な配慮が再び出現し、17世紀には子どもに対しての新しい配慮は意識を吹き込み、新しい感情生活を誕生させ、17世紀の近代の家族の感情である愛(幸福)が表現されるようになった。18世紀以降に社会を支配していく愛の感情生活の中で、子ども中心の世界が再編成され、家族と社会の壁が形成され、教育は変質した。

10. これからの時代～コンピューター時代

子どもを必要として、維持する能力をもつ唯一の技術がコンピューターであるが、かれらはコンピューター言語をおぼえなければならない。十分に読み書きできる人に要求されるのに類似した、人類共通のコンピューター言語の特別訓練が必要で、複雑で分析的な技能を必要とする。その時、子どもの学校制度は一時的に注目され重要性を増し、大人とは違った子ども文化が維持されるかもしれない。しかし、読み書きがよくできない多くの人たちは、視覚的なコンピューター・ゲームで遊ぶ。しかし、コンピューターは官僚的なエリートの管理下にとどまる。特別な能力をもつ、無垢な無邪気な子どものための教育する必要なく、特殊な能力をもつごく限られた子どものためのコンピューター教育技術が残され、子ども期は忘却への道を歩む可能性がある。人間以上の特殊能力をもつ子どもは、驚異的な機械をつくる欲望をもつが、そのような欲望を生み出す人間

精神性の偏りを知っておく必要がある。

11. 家庭と学校～最後の砦

子ども期の衰退を抑える、責任がもてる社会制度は存在するか。家庭と学校である親が子どもたちの情報環境が支配できなくなり、家庭の役割を減退させたものは何か？ テレビは「第二の親」、父親は映画やゲーム、スマホの後ろからついていく「第三、第四、第五」の父親。多くの親は子育ての自信を失い、専門家に頼ろうとする。しかし現実には、公共機関の立場を代表すると称する「未成熟な心理学者」が数多く招かれている。彼らは、親子を地獄に誘い込み、親の権威に侵入し、親子の信頼をうばう。

教師に助言する必要以上に、教師は学校の権威が衰退していることを認識することが必要である。学校は「子どもの世話をする家」ではなく、むしろ「閉じ込める家」になっている。読み書きがむずかしくなると時間がかかる仕事に情熱を失い、読み書きをやめてしまっても何か不都合があるのかとさえ思っているかもしれない。弱々しい努力とはいえ 家庭と学校は「子ども期」消滅の最後の防衛として有効である。

12. 人文主義の言葉思想（ユルゲン・トラベント）

16世紀、ルネサンス期に現れた人間中心の思想(ヒューマンイズム)は、紀元前のギリシャ・ローマの古典研究により、普遍的な教養を獲得し、中世的世界観のような非人間的な重圧から人間を開放し、人間性の再興を目指した精神運動が「人文主義」である。極めて長期間の暗黒時代を経て、難解な文献の読解によって歴史的距離を乗り越え飛躍したが、その土台となったのが言葉の働きであり、思想や文学の想像を可能にしたのも言葉の力である。言葉の再発見と共に、印刷技術がその流れを推し進めた。

メディアとしての言語：人間は「言葉と理性をもつ動物」である。個々の言語は、音声や文字により表現されるため、聴覚や視覚という感覚的能力の制約をうけるため、言理性的な思考を表現しながらも、音声的・文字的記号という物質である。言語は精神と物質という異なる領域にまたがり、両者をつなぐ働きをしている。言語が生き生きと働くのは、私が何かを話題にあなたに話しかけ、相互の応答がなされるような対話の場であり、言語を通じて社会性を身につけ、教養(自己形成)を促す。言葉とは、様々な領域の中間、精神と物質、理性と感覚、話し手(著者)と聞き手(読者)の中間にある。ラテン語で「中間にあるもの」という意味でメデウム(媒体)、その複数形が「メディア」である。言語は「中間に働く媒体」、典型的なメディアである。

言語と世界観の多様性: 多彩な個性をもつ人間のあり方を人間性の言葉でとらえ、人間は個々の文化のなかで自分の人格を形成する。自己形成の意味で教養と呼ばれるものとなる。人間の言語は分断され、意思疎通が困難と思われた。しかし、さまざまな言語や世界観の多様性は、同時に世界の「豊かさ」である。媒体としての言語は、人間と世界との関わりかたを多様化し、想像力を活性化し、文化創生に関与し、世界に深みを与える力の土台となることを願う。現代必要とされるのは異文化の言葉や文化、人間性の多様性への理解であり、異文化の言葉や文化、人間性の多様性への理解こそ、新人類が立ち上がる契機となる。

13. IC・ICT 教育

特殊な能力をもつ子どもを選別し 能力のないものは 身体的遊びが希少な「ゲーム」の世界に押しやられ 脳のパワー回復に必須の良質の睡眠の差別化に追いやる
人間を超えた特殊な能力をもつ人間をそだてるが その手からこぼれる目的不明の
新技術に 人間は未来をかけ 悪しき浅瀬・激流・そして命のボトルネックを潜り抜けようとしている

最後に

子どもの明日・未来を想う時 戦争のない平和な世界を願う時 今必要なのは言葉
ねむり 身体運動 そして森羅万象への静かな“祈り”とを感じる。

参考書

- 1) フィリップ・アリエス「子供の誕生」みすず書房 1980
- 2) ニールポストマン「子どもはもういない」新樹社1985
- 3) アンデシュ・ハンセン スマホ脳. 新潮新書 2020.
- 4) 田澤雄作. テレビ画面の幻想と弊害 悠飛社 2003
- 5) 田澤雄作. メディアに蝕まれる子どもたち 教文館 2015.

*本稿は宮城県小児科医会報第 267 号(令和4年 9 月発行)に掲載済(一部改変)